●春日部市民文化講座（第５回）　「千利休のわび茶 ～その５ －利休の弟子たち－」

◆日時：2013 年 3 月 27 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 6 階会議室）～12 時

■復活祭を前にして、今週は受難週

皆さん、こんにちは。私たちキリスト者にとっては、今度の日曜日がとても大切な復活祭があり、この一週間は受難週です。受難週というのは、イエス様がエルサレムに入京して十字架に架けられ、そして神の祝福に預かり復活されるまでの一週間でして、毎朝、5 時 45 分から 1 時間の礼拝を行っています。ですから、少々テンションが高いかも知れませんが、よろしくお願いいたします。今日は**「利休のわび茶　利休の弟子たち」で、小西行長**です。

■日比屋了慶と小西行長

お手元に「キリシタン大名　小西行長の信仰」という、僕が今書いている論文の中から**日比屋家と小西家の関係略図**【写真】をお持ちしました。この図にあるように**日比屋了慶**(りょうけい)と小西行長とは、親戚関係にありました。そして、堺に行ってみるとよく分かるのですが、日比屋家と小西家は、本当に近いところにあったのです。日比屋家と利休さんの家の 4 分の 1 位の距離といっていいでしょうね。両者は図に洗礼名があるようにキリシタンでした。そして、茶の湯では利休も了珪も同門といって良い間柄でした。同門でしかも、家がそんな距離でしたので、利休も日比屋了珪の家に度々訪れては、日比屋家で行われていたミサを見ていたのだと思います。これまでの話の中でも、「千利休のわび茶」には、キリスト教のミサの要素が入っていると言ってきましたが、私はそう信じています。ただ、これを証明しろと言われると、歴史は消されてしまっていたり、改ざんされているのでなかなか難しいものです。

■自立都市・堺

小西行長の話は、またの機会にしますが、“わび茶”というと**村田珠光**と**武野紹鴎**、そして**千利休**と並べられて、あたかも珠光の弟子が紹鴎で、その流れを利休が継いだように感じられますが、珠光(1423－1502)、紹鴎(1502－1555)、利休(1522－1591)と 100 年近くの時代差があり、珠光と紹鴎の間には一世代抜けているのです。紹鴎と利休との繋がりは間違いないようです。そして、紹鴎の時代には四畳半の“わび茶”が、堺の会合衆の間で定着していたことが伺えます。堺は、豪商達 40 人くらいの会合衆(戦国時代の自治都市の合議機関の呼称)により統治された自立都市国家でした。この町を訪れたイエスズ会の伝道師達は「堺の町は、はなはだ広大にして富豪な商人が多数おり、ベニスの如く執政官により治められている。」といい、さらに「日本全国当地堺より安全な所なく、他の諸国において動乱あるも、この堺には勝者、敗者もなくこの堺に至れば、皆平和である」といっています。豪商達が南蛮などとの貿易により蓄えた豊かな資金を、“わび茶”に使っていたわけです。そんな金もあり、名誉もあった豪商達が“わび茶”を好んでしたのは、公家や高級武士の遊興であった茶の湯を商売の拡大として使っていたこともあるでしょうが、さらに深いものがあったと考えられます。そして、“茶の湯”を戦国武士達も好んで始めます。**生死をかけた日々の中で、“茶の湯”に彼らが求めたものは、自分達が安心して居られる場所ではなかったかと思います。戦国大名たちが、自ら進んで“茶の湯”に傾倒し、茶の湯の座敷“茶室”に入り安心することができたのではないでしょうか。**

■御茶湯御政道

“茶の湯”は室町時代に始まり、戦国武士の間で盛んになりました。そして、織田信長の出現により、領地や城よりも“茶の湯”の道具である茶碗一つが価値をもつようになりました。その政策は**「御茶湯御政道(おちゃのゆごせいどう)」**と呼ばれました。豊臣秀吉に引き継がれ、徳川家康にも影響を与えます。その中心に千利休がいました。利休は“茶の湯”という文化をもって天下の人々の幸せを追求し、平和な世の中を作ろうとしたのです。信長は安土城を作り、城下に楽市楽座を開きました。信長亡きあと、秀吉は天下の平和を目指して働きますが、天下人となると聚楽亭(または聚楽第)を築き、天下の楽しみを集めようとしました。秀吉の“茶の湯”には、全ての名物を自分のところに集めようという欲望が見えてきます。そこには、利休と相容れない破壊の要素があったのではないかと思います。信長も秀吉も、“茶の湯”を通して人臣の心を支配するということを考えていたのです。利休もそのことは分かっていたのだと思いますし、そうした御政道に一役買っています。それは彼が商人だったからです。表千家の家元のところには、信長から利休、当時は抛筌斎(ほうせんさい)と呼ばれていたのですが、その利休のところに「鉄砲玉が届いた。ありがとう」という手紙があります。このことからも、当時、利休が武器商人として信長に近づいていたことを窺うことができます。

■利休の“わび茶”の完成

ここからは、利休の**“わび茶”**はいつ頃から完成に近づいていったのかということを、自刃前の10年間でみていきたいと思います。

◇1582 年（天正 10 年）利休 61 歳：山崎の地に待庵（二畳茶室）を造る。

◇1583 年（天正 11 年）利休 62 歳：大阪城が完成し、最初の茶会では、利休は津田宗及と一緒に茶頭を務める。

◇1584 年（天正 12 年）利休 63 歳：大阪城内に山里の座敷を開き、秀吉が数寄者を招いて茶会を催し、宗及、今井宗久、利休が茶頭を務める。この頃から、唐物だけでなく利休好みの道具が使われだす。

◇1585 年（天正 13 年）利休 64 歳：秀吉が禁中にて茶の湯を行うために、千利休の居士号が天皇から与えられる。同年 12 月 21 日に黄金の茶室が完成する。同年、大徳寺門前に不審菴（三畳台目）を造る。

◇1586 年（天正 14 年）利休 65 歳：九州の大友宗麟が秀吉を訪ねて上洛、島津征伐を嘆願する。秀吉は黄金の茶室でもてなす。その時に、秀長から「内々の儀は宗易（利休）に、公儀のことは宰相（秀長）に」とそっと耳打ちされ、宗麟は故郷に利休への信頼の厚さを手紙でしたためている。10 月、宗易型の茶碗が各地でもてはやされる。

◇1587 年（天正 15 年）利休 66 歳：神屋宗湛（博多の豪商）『宗湛日記』の 3 月 15 日、**「利休の茶は天下一」**との言葉が見える。島津征伐に向かった秀吉が箱崎にて『バテレン追放令』を出す。都では聚楽亭が完成する。

◇1590 年（天正 18 年）利休 69 歳：3 月 1 日、小田原攻めに陣に利休も入る。旅箪笥や、竹の花入が考案される。この頃利休は二畳座敷を多用する。8 月から翌年閏 1 月まで、利休が開催した百回の茶会、**『利休百会記』**が残され、道具組から**“利休（りくう）の茶”**が読み取れる。9 月 10 日の『宗湛日記』に利休が「上様は黒茶碗をお嫌いです」とのう記録があり、利休の“わび茶”と天下人・秀吉との確執が見られる。

◇1591 年（天正 19 年）利休 70 歳：利休の後妻・宗恩の子・お吟が自害する。2 月 13 日、秀吉から堺に蟄居を命じられる。淀の船着場には、利休を見送る細川忠興と古田織部がいた。2 月中旬、前田利家が秀吉に詫びるよう説得するが、利休はきっぱりと断る。2 月 25 日、遺偈を詠む「人生七十‥」。2 月 28 日、**聚楽亭にて自刃**。

自刃にあたって 3 人の検死役が来ると、二畳の茶室に招き入れ、お茶を振る舞い、それではと言って腹を召し、首を差し出したと‥一服を自分の命をもってもてなした利休、まさに**『一服一会（いっぷくいちえ）』**であります。

■茶の湯の作法は、キリスト教のミサの作法

ここで、山田牧師に『袱紗捌き』（写真）と『小茶巾による茶碗の清め』を実演してもらいます。これらの所作は、ミサで聖杯を清めるのとほとんど同じなのです。私がアッシジのフランチェスコ聖堂で見た、カソリックの修道士が行った作法と同じなのです。これは、日比屋了珪の家に出入りしていた利休に影響を与えたものと思います。また、敬虔なキリシタン大名であった高山右近の影響もあったと考えられます。利休が作った竹の茶杓は、白竹実竹で中央に節があります。これは十字架、クルスなのです。利休好みは秘めた思いなのです。歴史学者の**西山松之助先生**（1912-2012 年）は**「利休の茶杓は十字架を模した」**と論文に書いておられます。

■高山右近の生き方

高山右近は、勇猛果敢な武士であり、織田信長の家臣として度々戦場に立った熱心なキリシタン大名でした。そして、利休七哲の中でも第一が蒲生氏郷、高山右近と記されていますが、利休が“わび茶”を完成していく過程において重要な役割を持っていたと思います。山崎の待庵を造る際には、右近が目利きした杉丸太が使われました。天正 15 年、秀吉に従軍して島津征伐に同行していた右近なのですが、突然、秀吉による**「バテレン追放令」**が出されます。その時、秀吉から改宗を迫る 3 度の使者が送られます。2 度目は茶の師である利休でしたが、「武士は二君に仕えず。この世の富は全て殿下にお返し申し上げます」とキッパリと棄教を断りました。そして、このあと秀吉の前からは消えていくのです。しかし、前田利家の客将となって利家から 4 万石が与えられます。しかし、利休の死後 20 年（1613 年、慶長 18 年）が過ぎて、家康によって**「バテレン追放令」**が出され、1614 年マニラに向けて出航します。その時、右近は利休から贈られた茶の湯の道具で、塵や埃をはらう羽箒を手にしていたといわれています。この軸は、高山右近が出航 1 ヶ月前に細川忠興に送った**『日本訣別の書状』**です。この文の中で右近は「私は南海に赴き、いのちを天にかけ、名を流す‥。忠興殿はこのように私の人生をどのように思われますか」と問うているのです。イエス様は神から死を賜り、利休は秀吉から、そして右近は家康から死を賜るのです。**“わび茶の神髄”がここにあるのではないでしょうか。それは『捨ててこその道』です。自分を殺すことで他人を生かす。自分の死をもって永遠の命があるのです。高山右近と千利休に共通するのは、『捨ててこその道』であり、『一服一会』の茶があるのです。**

髙橋先生のお話からは、いつも私に足りない「茶の湯と向き合う厳しさ」を痛感させられます。